日本簿記学会第34回関東部会

（駒澤大学、2018年6月30日）

特別企画：井尻雄士先生を偲んで

３式簿記への招待

ー複式簿記の相対化ー

石川純治（駒澤大学）

要旨集

- はじめに：特別企画の趣旨
- ３式簿記への招待：複式簿記の相対化
- 複式簿記の構造とミステリー：簿記の学問性
- むすび：井尻先生の講義、貴重なアーカイブ
- 付記：昨年の関東部会からの経緯
- 参考資料：昨年の講演目次

井尻雄士先生を偲んで
ー貴重なアーカイブ

放送大学でのゲスト講義

- 第２回「簿記とは何か一単式、複式、三式」でのゲスト出演
- 第５回「複式簿記のサイエンス」でのゲスト出演

余談ですが：35年前の写真（CMUで）

Carnegie-Mellon Uni

ロケ準備（深沢キャンパス）

ロケ直前の準備

参考資料（前回の講演目次）

手始めに

簿記とは何であり、何でありうるか

構造・形態・形態化の見方：3つのレベル

Part Ⅰ　構造と形態－論理的相対

1）3式簿記をどう見るか

2）キャッシュフロー計算の複式簿記は考えられるか

Part Ⅱ　構造と歴史－史的相対

3）資金計算書の歴史と構造

手始めに

構造・形態・形態化の見方：3つのレベル

（H_2Oの例で）

⇩

簿記とは何であり、

何でありうるか

簿記とは何であり、何でありうるか

何であるか → 何でありうるか

← （現実にないもの）

⇩

複式簿記の相対化

（同型性と相対性）

第5回　複式簿記のサイエンス
～複式簿記とは何であり、何でありうるか～

講義のポイント

- 複式簿記とは、
  「何であったか」（過去）、「何であるか」（現在）、
  ➡さらに、「何でありうるか」（未来）

↓

複式簿記のサイエンス

第5回の内容

1. 複式簿記の構造
   －形態から構造へ
2. 複式簿記の解剖学
   －複式簿記のスケルトン
3. 複式簿記の形態
   －構造から形態へ
4. 構造と形態の見方
   －サイエンスの眼

補論 2つの複式簿記の結合
－3つの基本財務諸表の統合へ

4. 構造と形態の見方－サイエンスの眼

3つのレベル

イ 変わらぬもの（構造）

ロ 変わるもの（形態）

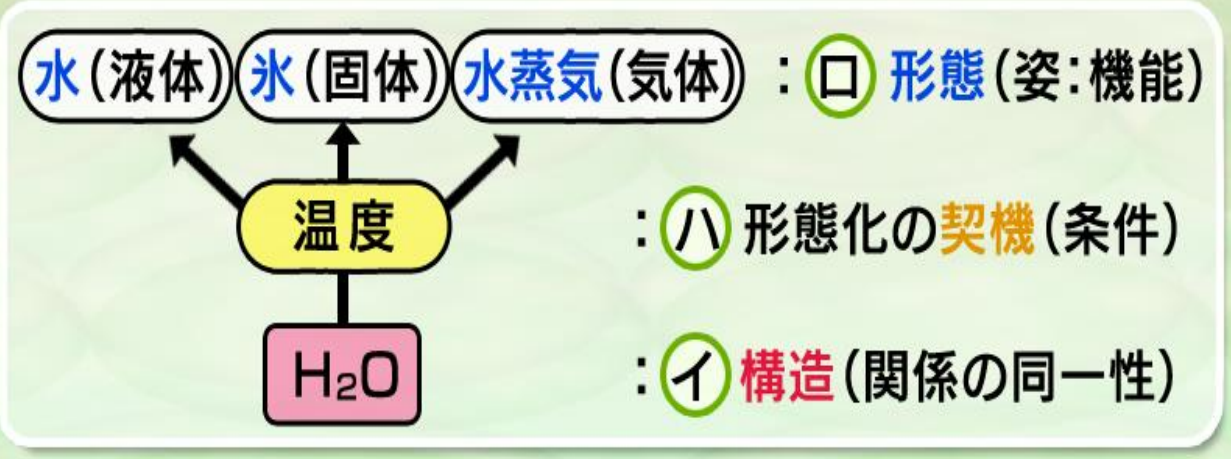
4. 構造と形態の見方－サイエンスの眼

3つのレベル

イ 変わらぬもの（構造）

ロ 変わるもの（形態）

ハ 変えているもの（契機）



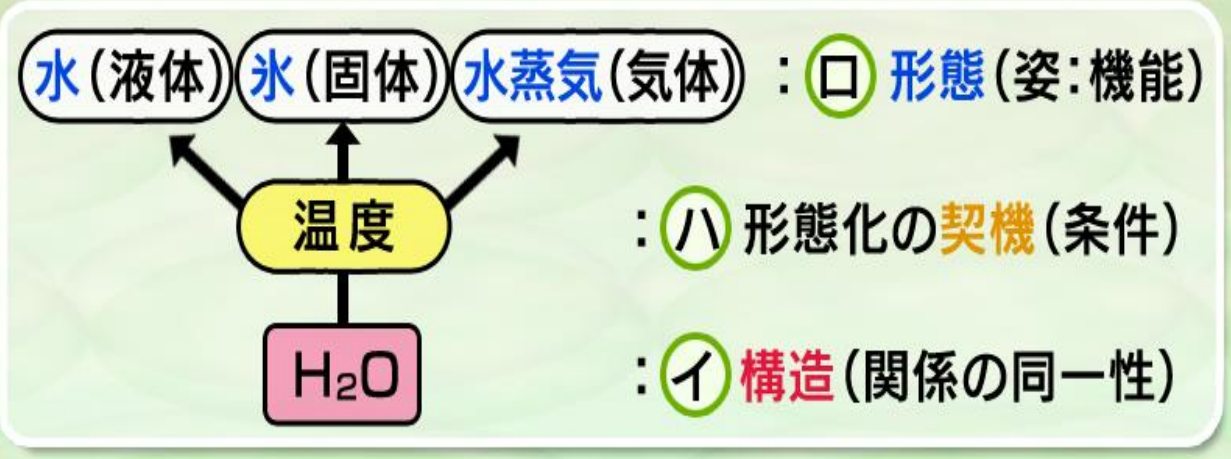
4. 構造と形態の見方－サイエンスの眼

3つのレベル

イ 変わらぬもの（構造）　：見えないもの（構造）

ロ 変わるもの（形態）　：見えるもの（形態）

ハ 変えているもの（契機）：見せているもの（契機）



簿記とは何であり、何でありうるか

何であるか → 何でありうるか

← （現実にないもの）

（構造） （形態）

⇩

複式簿記の相対化

（同型性と相対性）

Part Ⅰ 構造と形態
―論理的相対―

1）3式簿記をどう見るか

2）キャッシュフロー計算の複式簿記

↓

複式簿記とは何か

参考資料（前回の講演目次）

手始めに

簿記とは何であり、何でありうるか

構造・形態・形態化の見方：3つのレベル

Part Ⅰ　構造と形態－論理的相対

1）3式簿記をどう見るか

2）キャッシュフロー計算の複式簿記は考えられるか

Part Ⅱ　構造と歴史－史的相対

3）資金計算書の歴史と構造

２つの相対化

- 相対化とは

  現にあるもの

  →より高い見地（次元）から位置づける

- いかにして、その見地に立つか

  →２つ

  論理的相対化（Part Ⅰ：構造と形態）

  歴史的相対化（Part Ⅱ：構造と歴史）

第2回　簿記とは何か～単式、複式、三式～

講義のポイント

- 会計の基礎には**複式簿記**
  ➡複式簿記のない会計は考えられない
- 簿記の**常識・通念**を問う

⬇

現に存在する簿記を**相対化**
➡ 簿記とは何か

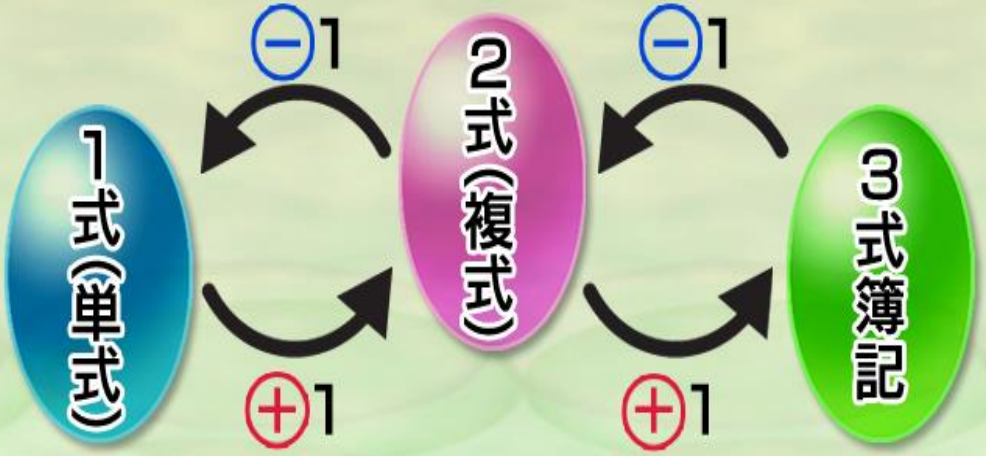
第2回の内容

1. 単式簿記と複式簿記
   －簿記の内と外
2. 複式簿記の内容と形式
   －形式を変えても変わらぬもの
3. 三式簿記への招待
   －複式の相対化
4. 言語としての簿記
   －複式簿記の力

3. 三式簿記への招待

「二式簿記」と呼ばれていたら

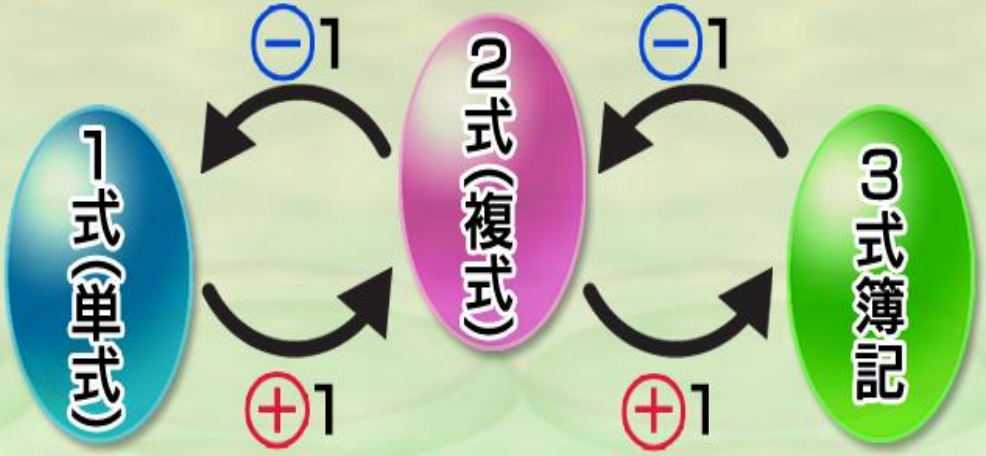
- マイナス1次元とプラス1次元



3. 三式簿記への招待

「二式簿記」と呼ばれていたら

- マイナス1次元とプラス1次元



- 相対化の視点

単式 → 複式 ← 三式

予算と三式簿記

- 出発点：複式等式（$X=Y$）を㋑どこに、㋺どう見る

㋑：どこ➡資産－負債＝資本：資本等式

㋺：どう➡「現在」（財産）＝「過去」（資本）

予算と三式簿記

- 出発点：複式等式（$X=Y$）を㋑どこに、㋺どう見る

㋑：どこ➡資産－負債＝資本：資本等式

㋺：どう➡「現在」（財産）＝「過去」（資本）

➡第3次元は必然的に「未来」➡「予算」

予算と三式簿記

- 出発点：複式等式（$X=Y$）を㋑どこに、㋺どう見る

㋑：どこ➡資産－負債＝資本：資本等式

㋺：どう➡「現在」（財産）＝「過去」（資本）

➡第3次元は必然的に「未来」➡「予算」

財産（X）＝資本（Y）＝予算（Z）

（ 現在 ＝ 過去 ＝ 未来 ）

設例

A社を2012年4月1日に50億円の現金出資で設立された
この1年間に、次のことが予想されているとする

#1	40億円の借り入れをする
#2	80億円の土地を購入する
#3	30億円の貸借料収入を得る
#4	10億円の諸経費を現金で支払う

この年度の#3と#4の実際は、次の通りであった

#5	貸借料収入は40億円であった
#6	諸経費は15億円であった

期首試算表

（億円）

〈財産 X〉		〈資本 Y〉		〈予算 Z〉	
現金	50	資本金	50	目標資本	70
				予想収益	−30
				予想費用	10
財産純額	50	資本純額	50	予算純額	50

期中仕訳

	〈財産 X〉		〈資本 Y〉		〈予算 Z〉	
#1 借入	現金	40				
	借入金	−40				
#2 土地購入	土地	80				
	現金	−80				
#5 賃借収入	現金	40	収益	40	予想収益	40
#6 費用	現金	−15	費用	−15	予想費用	−15

期末試算表

期首計算表＋期中仕訳＝期末計算表：自動作成

〈財産 X〉		〈資本 Y〉		〈予算 Z〉	
現金	35	資本金	50	目標資本	70
土地	80	収益	40	予想収益	10
借入金	−40	費用	−15	予想費用	−5
財産純額	75	資本純額	75	予算純額	75

簿記システム化の意義

- 第3次元の予算の欄…予算と実績との差異
  その自動作成の仕組み
  ➡複式簿記の仕組みと同じ

簿記システム化の意義

- 第3次元の予算の欄…予算と実績との差異
  その自動作成の仕組み
  ➡複式簿記の仕組みと同じ
- 単式から複式への展開との共通性
  - 原因別計算を簿記の内へ：第2の勘定（損益勘定）
  - 予算・実績の差異要因を簿記の内へ：第3の勘定（予算）

  ➡自動作成の仕組みをビルトイン（簿記システム化）

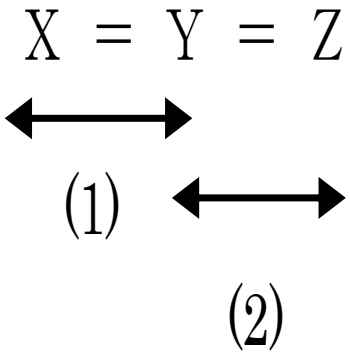
簿記システム化の意義

- 第3次元の予算の欄…予算と実績との差異
  その自動作成の仕組み
  ➡複式簿記の仕組みと同じ
- 単式から複式への展開との共通性
  原因別計算を簿記の内へ：第2の勘定（損益勘定）
  予算・実績の差異要因を簿記の内へ：第3の勘定（予算）
  ➡自動作成の仕組みをビルトイン（簿記システム化）

⬇

- Recording（記録）とReporting（報告）：2つのRの区別
  単なる報告ではなく、記録を通す

図１　X＝Y＝Zの見方：X＝YとY＝Zの関係の同型性



（要旨集p.1)

- 利速会計ではS･F関係

X（ストック）＝Y（フロー）

↓微分

Y（ストック）＝Z（フロー）

補足：3式展開の2つのレベル

〈取引〉

取引仕訳

（x＝y）

↓

3式？

（x＝y＝z）

〈財務諸表〉

B／S

（X＝Y）

↓

3式

（X＝Y＝Z）

簿記システム化の意義

- 第3次元の予算の欄…予算と実績との差異
  その自動作成の仕組み
  ➡複式簿記の仕組みと同じ
- 単式から複式への展開との共通性
  原因別計算を簿記の内へ：第2の勘定（損益勘定）
  予算・実績の差異要因を簿記の内へ：第3の勘定（予算）
  ➡自動作成の仕組みをビルトイン（簿記システム化）

⬇

- Recording（記録）とReporting（報告）：2つのRの区別
  単なる報告ではなく、記録を通す

言語としての複式簿記

↓

複式簿記の無言の力

簿記の内と外：内←外

（ビルトイン，言語システム化）

4. 言語としての簿記

釈明と簿記

- 単式から複式：損益の原因別計算による釈明
  複式簿記＝仕訳から決算まで釈明の記録システム

4. 言語としての簿記

釈明と簿記

- 単式から複式：損益の原因別計算による釈明
  複式簿記＝仕訳から決算まで釈明の記録システム
- 複式から3式への展開
  予算・実績差異要因➡検証可能な釈明の記録システム
  ➡報告・開示

4. 言語としての簿記

釈明と簿記

- 単式から複式：損益の原因別計算による釈明
  複式簿記＝仕訳から決算まで釈明の記録システム
- 複式から3式への展開
  予算・実績差異要因➡検証可能な釈明の記録システム
  ➡報告・開示
- 簿記の中に「会計責任」
  会計責任が簿記システムを通して組織的・自動的・継続的に実行される

複式簿記の無言の力

- 言語は単なる表現手段にとどまらない
  - ➡認識を規定

複式簿記の無言の力

- 言語は単なる表現手段にとどまらない
  ➡認識を規定

単式から複式：損益の原因別帰属の判断を強要
三式簿記：差異要因に関する判断が促される

複式簿記の無言の力

- 言語は単なる表現手段にとどまらない
  ➡認識を規定

  単式から複式：損益の原因別帰属の判断を強要
  三式簿記：差異要因に関する判断が促される

- ハイエクの洞察

「問題は…いかにして意識的管理の必要を省くか、
そしていかにして、個々人にかれらの為すべきことを
誰かが告げる必要なしに、望ましいことをさせるような
誘因を与えるか」〔ハイエク/田中真晴・田中秀夫 編訳『市場・知識・自由』〕

補足資料1　3式簿記から利速会計へ

(要旨集に掲載)

- 利速会計とは何か（what）：理論

  微分会計の構造

- なぜ利速会計か（why）：実践

  速度計算の計器（簿記）

- 会計の表現形式、語彙、表現力

  仕訳と俳句、喩えの見事さ

- パチオリからイジリへ

  簿記とはそもそも何であろうか

補足資料2　井尻作品のコアにあるもの

(要旨集に掲載)

１　研究の軌跡－３つの段階
２　洗練された優雅さ－複式簿記の美
３　会計の卑近さと深さ－おこぜ論
４　２つのあこがれ－「ファウスト」の一節
５　エレガンスとリッチ－リビングシステムとしての会計
６　基礎学問につながる会計学－本当の「理解」とは
７　会計研究の「道づけ」の難しさ－自由と苦悩
参考文献

井尻雄士先生を偲んで
ー放送大学でのゲスト講義

TV番組「社会のなかの会計」

- 第２回「簿記とは何か一単式、複式、三式」でのゲスト出演

- 第５回「複式簿記のサイエンス」でのゲスト出演

Carnegie-Mellon Uni

第5回の内容

1. 複式簿記の構造
   －形態から構造へ
2. 複式簿記の解剖学
   －複式簿記のスケルトン
3. 複式簿記の形態
   －構造から形態へ
4. 構造と形態の見方
   －サイエンスの眼

補論 2つの複式簿記の結合
－3つの基本財務諸表の統合へ

技術性と歴史性－形式と内容

- 人工の加わった記録・計算の道具（安平）：
  「その弾力性に何を盛り込んでいくかということが、
  その時代時代の要請に応じた簿記の記録・計算の仕方」

技術性と歴史性－形式と内容

- 人工の加わった記録・計算の道具（安平）：
  「その弾力性に何を盛り込んでいくかということが、
  その時代時代の要請に応じた簿記の記録・計算の仕方」

- 複式簿記：技術性、形式
  企業簿記：歴史性、内容
  } 区別（木村）

技術性と歴史性－形式と内容

- 人工の加わった記録・計算の道具（安平）：
  「その弾力性に何を盛り込んでいくかということが、
  その時代時代の要請に応じた簿記の記録・計算の仕方」

- 複式簿記：技術性、形式
  企業簿記：歴史性、内容
  } 区別（木村）

- 両者をつなぐもの
  社会科学では“仮”の姿としての形態が史的変化
  「変えているもの」の重要性：動態的契機
  ➡形態化の論理

5つの対概念とつなぐもの――一連のキーワード

- サイエンスの基本にある見方、捉(とら)え方
  自然科学か、社会科学かを問わない

1	構　造	――	形　態
2	同型性	――	相対性
3	形　式	――	内　容
4	技術性	――	歴史性
5	一般性	――	個別性

複式簿記と数学ーなぜ数学者か

- 形式科学としての数学－数学者の登場

  グラマティウス（16世紀、独）、ステフィン（17世紀、蘭）、ハットン（18世紀、英）、ケイリー（19世紀、英）など

  ➡今日、知的関心を示すものとなっていない

複式簿記と数学ーなぜ数学者か

- 形式科学としての数学－数学者の登場

  グラマティウス（16世紀、独）、ステフィン（17世紀、蘭）、ハットン（18世紀、英）、ケイリー（19世紀、英）など

  ➡今日、知的関心を示すものとなっていない

- 複式簿記のサイエンスを

  簿記・会計の専門外の人たちにも魅力あるものに

  ➡新たな簿記学の方法（基礎と応用）の研究

  「複式簿記とは何でありうるか」

↓

複式簿記のサイエンス

むすびにかえて：井尻先生が存命なら

- 量子情報と会計情報

- 新しい経済のあり方（AI、ブロックチェーン、シンギュラリティ、…）
  ⇨ 新しい会計のあり方

ご静聴に感謝！

付記　震災から1年、そして今

おっしゃる通り、「考え続ける」、これが大切ですね。特に、今どういう性質の危機にあるのか、それを深く考え続ける必要がある。

なのに、１年という年月が、ふたたび日常的な仕事にもどしているんです。阪神大震災後と同じ経過をたどっているわけで、“たこつぼ的”な仕事に終始する日常にぞっとすらします。一種の自己矛盾、自己欺瞞、自己嫌悪。

このインタビューもある種そうですね、本来なら、受けてはいけないでしょう。

（簿記学会インタビュー2012年2月、冒頭より）

震災から1年、そして今

非日常がずっと、あるいは一生続いている人たちがいる一方で、その非日常が一過性、一時的な人たちが大勢いるわけ。

簿記会計の教育・研究もまたしかり。安全・安泰な日常という大前提あってこそですが、その前提は危ういもので、いつ非日常化しかねません。確固とした根拠のあるもんじゃない。

ちなみに、竹中さんがいみじくも言われた「やましさ」なんですが、それをつきつめていけば、無力感ひいては自己否定的、あるいは自己欺瞞性になってきますね。

（簿記学会インタビュー2012年2月、冒頭より）

「検証、実物必要」「議論、まだ早い」

被災者に配慮しつつ、震災の記憶を伝えるにはどうすればいいのか。

「後世に教訓を伝えるにせよ、津波のメカニズムなどを研究するにせよ、実物が残っていないと効果がない」。首藤伸夫・東北大名誉教授はそう語る。

宮城県内の研究者ら十数人と5月、「3・11震災伝承研究会」を発足させた。県や自治体の担当者も交えたこれまでの2回の会合では、保存の必要性を訴える意見が相次いだという。

一方、災害遺構の保存に詳しい関西学院大学の今井信雄准教授（社会学）は「残すにせよ壊すにせよ、被災者にとっては大きな区切りとなるが、まだそんな段階ではないのでは」。阪神淡路大震災では、神戸市長田区の旧公設市場で大火に耐えた防火壁「神戸の壁」を保存すべきだとの声が地元からあがったのは「震災から5、6年経ってからだった」と話す。

広島市の原爆ドームもかつて、取り壊しを求める声が多かったが、今では世界遺産に登録されている。